

2007.9.22(土)~24(月)

北穂高岳 滝谷

4尾根、ドーム中央稜、北壁・左右ルート
S 藤英明、原里志、M尾恵、S 口光恵
T 鉤克比古、H 川泰敏(神田山の会)
嵐文彰(神田山の会)

魚津恭太と美那子

S 藤英明

そういえば「氷壁」の魚津恭太が美那子への想い果たせぬまま落石で命を落としたのは滝谷でした。初日は鶴田真由って演技下手だなーなんて思いながら、上高地から一気に北穂まで登ったのでした、が、中高年の我々には厳しかった。全身全霊ボロボロになってしまいました。

一方、北穂の小屋は、生ビール美味しいご飯美味しい、運良く7人で個室がとれてベリー快適でした。

それにしても、3000メートルの稜線は涼風というか早くも寒風が吹き荒んでいました。

<第4尾根 主稜>

二日目は夕方まで小屋に戻ればいいやということで、長い4尾根に向う。松濤岩からC沢を下るが、スゴイ急勾配に加えて、落石の巣窟みたいになっていて、死んでしまうかもしれないと、恐怖の及び腰で2時間もかかって、噂に聞くスノーコルとやらに到着。(眼下に槍平の小屋が近いくらいに降りた。)そこに、下から遡行してきたという(きっと凍傷で)指の欠けたカッコイ老クライマーが忽然と登場しました。

オーダーは、H川 - 嵐 / 英明 - M尾 - T鉤 / 原 - 光恵の順、件の老クライマーは、我々に割り込むことをせず、最後尾の光恵さんのご指導をしてくれた様子。紳士です。

4尾根は、最初は簡単だけど、だんだんと、難しくなってくる。3ピッチ目あたりから、硬くスッカリした岩になると思ったら、ホールドもスタンスも時々カタカタしていて、不用意に掴んだら、とんでもない

ことになる。

強烈な高度感に相まって、見まわすと滝谷の壮絶な展望が広がる。まーなんて恐ろしいところでしょう。こういうところに一生に何度も来てはいけません。

いよいよ、最後の核心2ピッチ、というところで、雨が降り出す。泣いてしまいたい気分だが、とにかく、登り切るしかない。ホールドはポチャポチャ、スタンスはツルツル、心臓はバクバク。

そんなとき、上部の縦走路からか? 冷蔵庫みたいな落石が轟音とともに降ってくる。落石は眼下雪渓の彼方までパーンパーンと砕け散りながら激しく落ちて行きました。こわ。

<ドーム中央稜>

T鉤さんは一昨日の北穂イッキと昨日の4尾根でお疲れのため休憩。英明 - 光恵 / 原 - M尾の組み合わせで登る。

アプローチは怖い。チョットでも躓いたら、一気に飛驒沢まで飛んでしまいそー、なんて騒ぎながら、お尻ズリズリ降りしながら降りると、シッカリとした懸垂ポイントに到着する。

中央稜は、1ピッチ目(なことになるがチムニーの外側)が想定外に難しい。よって、いろいろと掴ませていただく。残置したアブミに、全員、手も足もガッチリ入れて、しがみつく。

その後の各ピッチともワンポイント・ムズイところがあって、それなりに楽しめました。ドームのテッペンに抜けて気持ちよくスッカリ終了でした。

<ドーム北壁 右・左ルート>

H川 - 嵐の神田組で2ルート継続登攀にチャレンジする。H川 - 嵐組は高価なカム(C4)の3番を落下させ、ついでに、2番を紛失してしまった・・・哀れ、ご愁傷様です。

下山時、ザイテングラート付近にヘリが飛来して、滑落した方をピックアップしていました。山は下山が核心です。

泣く子も黙るC沢 嵐文彰(神田山の会)

「泣く子も黙る・・・」じゃなかった「飛ぶ鳥もかよわぬ・・・」という滝谷。アプローチのC沢はやっぱり悪かった。やっぱりここが核心かなあ。まず、浮石の上を泥棒歩きしなければいけません。溪流釣りの場合、岩魚が逃げないように沢をなめるように歩きますが、ここでそのスキルが役に立ちます。

次に、すごく下降が長いので、だんだんイヤになってきます。アプローチで神経と体力が消耗しちゃいます。二俣のところに来る頃はドームは天空の上にそびえているのです。もう、こんなに降っちゃったら帰れないよおとも思います。そんなに降りてから、稜線まで突き上げるのがこのルート。よくよく考えれば、とても物好きなルートです。

クラシックルートというからには登り応えがあるのかな、と期待してはいけな

いようです。昔は靴がクレッターだから、こういうところしか登れなかったのかもしれない。

ルート自体は、だんだん傾斜が急になり、後半に行けば行くほど面白くなります。となると、途中から取り付けないの？とも思えます。来年あたり、誰かが開拓してくれると、ドームばりの人気になるかもです。

鳥も通わぬ4尾根 T鮑克比古

滝谷がどこにあるのかも知らなかった。案内書を見れば「鳥も通わぬ」「陰惨な印象の」とか暗いイメージの言葉が連なっている。地図で捜すと、それは北穂高岳のすぐ西側にあった。2年前に滝谷を登った会員からはアプローチの危険さを何度も聞かされていた。どうも恐ろしい所のようにある。

30年ぶりの上高地から、初めての徳沢、横尾を通り、有名な涸沢へ登った。写真で

松濤岩とドーム

氷壁（井上靖）

新鋭登山家の魚津恭太は、親友の小坂乙彦と共に前穂高東壁の冬季初登頂の計画をたてる。山行の直前、魚津は小坂の秘密を知る。小坂は人妻の八代美那子とふとしたきっかけから一夜を過ごし、その後も横恋慕を続けて、美那子を困惑させているというのだ。不安定な心理状態の小坂に不安を抱きつつも、魚津達は穂高の氷壁にとりつく。

吹雪の厳しい登攀の中、小坂は滑落、谷底へと消えていった。二人を結んでいたナイロンザイルが切れたのだ。小坂は見つからず、捜索は雪解け後に持ち越される。失意のうちに帰京する魚津。そんな思いとは裏腹に世間では「ナイロンザイルは本当に切れたのか」と波紋を呼んでいた。そして、魚津はその渦に巻き込まれていく。

ザイルの製造元は、魚津の勤務する会社と資金関係があり、さらにその原糸を供給した会社の専務は、小坂が思いを寄せていた美那子の夫の八代教之助だった。<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B0%B7%E5%A3%81>



前穂北尾根



槍ヶ岳

知っていた涸沢ロッジの鯉のぼりが9月にも翻っていて、思わず笑ってしまう。

涸沢から先、北穂小屋までの登りが今回の僕の核心になった。あの急登(下山してなおさらその急坂に驚く)に僕は息絶え絶え、足は遅々として進まない。いやはや苦しかった。北穂の山頂からの英明さん、M尾さんの声援に励まされ、もうかなり暗くなった18時過ぎに小屋に辿り着くことができた。

2日目、4尾根を登ることができた。なるほどそのアプローチは最悪。崩れた大きな岩までが谷を流れ出しそうな気配だ。4尾根の取り付きまで石、岩を動かさないように足の置き場を一步一步確かめながら神経を尖らせて下らないといけない。

滝谷はすごい岩場だった。右を見ても左を見ても垂直に近い絶壁が遥か下のほうからガンと立ちあがっている。岩の色は黒に近い茶色で確かに荒れた感じがしている。崩れ行く滝谷は巨大な岩の墓場とい

ったところか。すばらしい岩場なのに真に美しい。

登攀自体は最後の一手を除きそう難しくはなかった。A0でいけば自力で這い上がれたと思うが先にプロテクションをはずしてしまっていて、かなわなかったのが残念。他は少し難しいところもあったが、適度な緊張感で登ることができて楽しめた。怖かったのは、もう数ピッチでお終いというところで雨が降り出した時。岩が濡れてきて足を乗せてみるとズルッと滑る。思わず先月行ったチベットの仏様を思い出して「雨を止ませてください」と拜んでしまう。それと、登攀途中にも岩はかなり浮いていて大きい奴がグラリと動くことが多いのにも参ってしまった。

4尾根は10ピッチ以上もある長い尾根、疲れるが楽しみも長く続く。今回はリードができる登攀を心がけて登ったつもりだが、ルートファイのことなど意識し忘れたことも多々あり今後の課題。



3日目、前2日で疲れきった僕は皆さんより先に下山。涸沢までの急下りに改めて驚き、涸沢ロッジの鯉のぼりを間近に見て、上高地に下りてからは河童橋の近くの食堂で生ビールを飲み、コーヒーをお替りしながら次々に窓の外を通り過ぎる観光客、ザックを背負った登山者を眺めて皆さんの下山を待った。

思い起こせば楽しい3日間だった。クライミングはいい！あの緊張感が体に程よいテンションとリズムを与えてくれるようだ。

この計画に誘って下さったリーダーの英明さん、4尾根でザイルを組んだM尾さん、そして皆さん、たいへん、お世話になりました。次の機会にまたよろしく願います。

◆ 25年ぶりの本ちゃん

S口光恵

天下の滝谷に行けることとなった。あの滝谷である。氷壁の舞台の滝谷である。

岩登りに入ってしまったら、ロープが前にある限りはカラビナでもなんでもつかんで登ってしまえばいいと開き直っていたが、私の最大の不安は北穂小屋までのアプローチである。だいたい涸沢に行くのも何十年ぶりで、行くたびに涸沢までバテていた気がする。それが今回は北穂まで上がるのだ。とにかくみんなについて行くしかない。

涸沢までは人の列の中でゆっくり歩けたおかげでそんなに疲れることはなかった。しかし涸沢から北穂への急登に入ったとたんに足が上がらなくなった。10歩、歩いて休んでいたのが、5歩、歩いて休むようになる。これじゃあまるで高所登山である。忍耐、忍耐これのみだ。なんとか明るい内に小屋に着けた。ご褒美は親切な店員さんが入れてくれた生ビール。お・い・し・い！

岩登り第一日目は四尾根、次の日はドーム中央稜。25年ぶりの本番の感想は、もっといろいろ練習しなければいけませ



ん！ということです。でもダイナミックな景色、気持ちの良い高度感、素晴らしい経験ができました。やっぱり穂高はいいな。明るくてカラッとされていて。

英明さん、原さんありがとうございました。M尾さん、T鮑さん、楽しかったです。神田のH川さん、嵐さん、お世話になりました。

◆ ドーム中央稜と百恵ちゃん

M尾恵

昔『鳥も飛ばない……』と言われた滝谷。大キレットから、北穂・奥穂の縦走路から、飛驒沢から、そして対面する笠が岳から、何度となく眺めていた滝谷。暗い、陰湿、怖いと言う印象だけの岩場。でも、怖いもの見たさで1度は登って見たかった滝谷。

「ついに、行ってきました！登って来ました！???」

「2度と来ないぞ！」と思った前日の4尾根へのアプローチ。足元が崩れたら自分ごと吹っ飛んでいきそうなC沢左俣の下降。剣の池ノ谷ガリーなんて比べものにならないほどのガレガレルンゼだった。でも、中央稜へのアプローチは10倍、ラクでしたー！

でも、登攀が大変でしたー！トポには、、、となっている。それなのに、1ピッチ級から超必死！先行P、リードの英明さんが上のクラックでアプミを出している。我Pリードの原さんが「アプミ、回収できなかつたー！」と叫んでいる。何で級でアプミなの？と思いながら登る。ムムッ！手、無い！足、無い！……ラッキー！……アプミがあった！アプミを掴んでゴボウで登り、必死でアプミに足をかける。「フー！これでー安心！」でも、まだまだ核心は続く。アプミを残置するわけには行かない。チョックストーンを左から回り込み、左手でガバを掴み、落ちそうになりながら必死で右手を伸ばす。「外れないよー！ちょっと待ってー！アッ、外れた！あれえー！動けない！なァーんだ。又

ンチャク、もう1つ付いてたー！」ゼーゼー言いながら何とか狭い終了点へ。“まったくー！これってほんとに級？岩トレ不足の私には10aに思えるよ！

続く2ピッチ目、4ピッチ目、5ピッチ目も各1箇所ずつ核心部がある。2ピッチ目、アプミに乗ったまでは良かったが、狭すぎて腰から下が挟まって抜けない！足の入れ替えができない！2分くらい、もがきにもがく。4ピッチ目、フェースが細かすぎてA0に次ぐA0。ハーケンに足がかかる。5ピッチ目、初っ端からガバが遠くて届かない！「ジャンプー発！」なんて言われたけど、そんなこと、できるわけがない。又ンチャク掴んで、細かいスタンスにソーツと乗り、エイッ！抜け口手前はツルツルの右トラバース。原さんは又ンチャク掴んで振り子で行け！と言うが怖くてできない！又ンチャク掴んでその上のハーケンに又ンチャクかけて……右手を伸ばしてガバを探る！ヒィー！助かったー！怖かったー！面白かったー！“お疲れさーん！”

約束なしの お別れです
今度はいつと言えませぬ

あなたの燃える手

あなたの口づけ（誰？）

あなたのぬくもり

あなたのすべてを

きっと 私 忘れませぬ

後姿 見ないで下さい

Thank you

for your kindness 

Thank you

for your tenderness

なぜか気がつくと、百恵ちゃんの「さよならの向こう側」を口ずさみながら登っていた私でした！

“滝谷よ、さようなら！”私、アルパインともそろそろお別れです。（冗談よーん。毎週、行くことに決めました。氷も毎週行くもんね。）

北壁は右ルート、左ルート、北西カントの3ルートを持ち、各ルートとも人工を交えると言ってもいずれも3ピッチの短いルートである。しかし、標高3千メートルの場所で、ギャラリーも豊富？なオキラク&快適なクライミングが出来る。特に縦走路からのアプローチも短く、4尾根取り付きのような岩雪崩の巣窟を下らないだけでもありがたい一ルートである。

今回は下山日のクライミングであるが、右から回り込んでの左ルートと右ルートの2本を登った。

取り付きは縦走路の鞍部から分かれる踏み跡をたどる。少々下ると懸垂支点がある。1本目は懸垂で下降(50mザイル1本)してから緩傾斜帯を北壁基部に向かって歩いたが、2本目は懸垂せずに支点脇を通り抜け、そのままトラバースして基部へ到達できた。1箇所微妙そうな場所があるが、初心者がいなければ懸垂の必要は無いと思われる。

3本のルートは三つ峠のゲレンデのような感じで3本横並びになっており、取り付きは分かり易い。

1本目、狭いチムニー登りのある右ルートに取り付く。さすがに3千m級の朝1本目のクライミングは冷え込む。そのため「チムニーはカップが破けるからフリースを貸せ」という嵐の訳の分からない問答の末、結局しぶしぶそのまま嵐がトップで取り付く。

出だしはフリーで、初めちょっと苦労するが、さらに上部の狭いチムニーに入ると今度は「体が動かない」と言うことでのちもさっちも行かない状態になり、そのまま右ルートは諦め、トポにもある、「右から左ルートへ」のトレースで左ルートに出たところのビレイポイントで1ピッチを切る。

2ピッチ目は人工ルートH川リード。やや寝た壁なのでむしろアプミへの足入れがしにくい箇所もあったが、ハーケンは大

タうちで安心(^.^)。フリーに移る場所も難しくなく快適に2ピッチ目を切る。

3ピッチ目は3級のフリールート(嵐リード)。ここは上部終了点に近づくほど浮石が多く、落石、浮石に注意しながら登る。最後は慰霊プレートの打ち込まれているビレイポイントに向かえられて終了。

のんびり休憩後、中途半端な残り時間のため2本目はどうするか、と考えながらドームの頭を巻いて縦走路に戻り、再び北壁基部へと向かう。時間もあまりないので、「右ルートの攻略」を行い、ダメだったら懸垂で戻るということで、今度はH川リードで取り付く。

取り付きは右側にハーケンが打ってあるので、右から登りたくなるが、左から取り付いた方が楽。狭いチムニーは嵐よりも小柄な体をめいっぱい活用して、フリーでチムニー内をもぞもぞのぼる。チムニー下段から見える最上部のハーケンまで行かずにチムニーを右に一度抜け出したところでピッチを切る。嵐は大きな体格、荷を背負っているというマイナス面からセカンドでもチムニーを抜け出せずかなり苦労していた。



雷鳥

2ピッチ目は人工。一瞬チムニーに戻ってから右壁を人工で登る。左ルートと比較すると右の方の壁が寝ており、やや難しい。セカンドであったが、途中シュリングもちぎれて肝を冷やす場面も。人工からフリーに抜けるところでは浮石も多いらしく、トップの嵐がなかなか進めない。ちょうどそんな時、ドーム中央稜を終え、下山途中の英明パティーがギャラリーとして加わる。「なかなか動かないなー！」のきつい一言。「は、はいっ、もっと人工の練習します！！」と呟く。

3ピッチ目はH川リードでまたまた浮石の多い3級のフリールート。落石、浮石に注意しながら進む。終了点は見覚えのある(左ルートと同じ)慰霊プレートのピレイポイントであった。

結果的に下山日にもかかわらず、午前中を利用して2本登ることが出来た。またこの3連休は天候にも恵まれ、ぶなの会の方々とも楽しく交流が出来て楽しく、充実した(下山の駆け足も含めて!!)連休を過ごす事が出来ました。企画&総Lの英明さんありがとうございました。そして、ぶなの会の皆さん、また機会があればよろしく願いいたします。

中国から帰ってきたばかりでボーとしていました。確かこの計画は6月ごろからあったように思うが、山行直前までポケットとしていたため、リーダーの英明さんを初めメンバーの皆さんにご迷惑をおかけしました。すみません。

滝谷登攀は初めての経験。15年以上も前の一ノ倉かバットレス以来の岩本番。ポケットしながらも楽しみと不安の入り交じった気持ちで山行を迎えた。

装備表にエイリアンとかあり、奮発して買おうかと思ったが英明さんからお借りできた。実は、下手クソのくせに、昔はこんなもの使わずに登ったのだから、いらないや、などと、内心少しイキがっていた。でも実際に、3級程度(階段程度)の部分が5メートルもノーピンで続くと、これもものすごく重宝というか、心強い存在であることがわかった。自分のアホに少し気がついた。やはり奮発するしかない。

滝谷へのアプローチの下降は話のとおり落石の危険が大きかった。

4尾根。緊張しました。トボとなかなか一致しないので、少し途方にくれるが、縦走路にひょこっと出たときは安心した。小屋へ向けてビール、ビール。

ドーム中央稜、5級。いままでリードしたことのないピッチが2つもある。朝になったらおなかが痛くならないかなあーとか、高熱が出やしないかと、職場をボカす理由に近いものを考えながら前夜は寝るにいたった。

当日、メンバーの一人が下山するということで、思わず便乗を試みるが、英明さんを除く全員が私もとと言い始めるので、黙るしかなかった。取り付きを見つけるのに少し苦労した。かえりましょ、の言葉が石原の頭の中にさ迷い続けた。「取り付け発見」の英明さんからの朗報に覚悟を決めた。1ピッチ目。英明さんはアブミを出して登っている。続く石原もまねをする。5級とされるピッチはA0およびA1の連打で登り、フリーのレベルの問題ではなく、なんとか終了できた。感慨ヒトシオといきたいところだった。

しかし、今日中に帰京するという、おろしたてのパンツを履くような、厳しい難題が待ち構える中、高年登山者の歩きの速さに脱帽しつつ、家に辿りついたのだった。



ドーム北壁 人工からフリー



ドーム中央稜 終了点にて安堵&笑顔